

翻訳

オトフリート・ヘッフェ

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

——プラトーン『国家』篇、第二卷、367a-374d——

永井健晴

〔テキストについて〕

ここで訳出したテキストの著者と原題は、Otfried Höffe,

Zur Analogie von Individuum und Polis である。この論文

は、Akademie Verlag が刊行している叢書、Klassiker

Auslegen の第七巻、Politeia (Hrsg. von Otfried Höffe)

「プラトーンの『国家』篇に関する、当代の研究者たちの哲

学的ないし文献学的な解釈を集めた論文集」に収められた、

編者自身による第四論文である。この叢書の第七巻と、その

編者であり、かつこの第四論文の著者であるオトフリート・

ヘッフェとについては、すでに以前に簡単に紹介したので

(本誌、第九卷第二号、第一二卷第二号)、ここでは再度触れ

ない。因みに、本誌ですでに訳出を試みたのは、この叢書の

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

第七巻の第八論文 Robert Spaemann, Die Philosophen-
könige (Buch V 473b-VI 504a) と第一論文 Otfried Höffe,
Einführung in Platons Politeia である。

プラトーンの名著、『国家』篇の主題は、サブタイトルが
示しているように正義(ディカイオン、ディカイオシユネ
ー)である。第二巻の半ばまでの所謂「トゥラシユマコス
篇」において、プラトーンは、正義について、初期の対話篇
に特徴的な批判的考察を展開する。

正義とは何か。正義は不正に勝るか。正義と幸福(エウダ
イモニア)は一致するか。これらの問いをめぐって、ポレ
マルコスやトゥラシユマコスとのディアロゴスが繰り広げら
れる。しかし、これらの対話は、他の初期対話篇と同じく、

結論を得ないまま頓挫する。

ヘッフェに従えば、第二巻の半ばに、全編の主題と方法との二重の転換が設定されている。主題は、一般的正義ないし人格的正義から政治（ポリス）的正義へ、方法は、批判的考察から構成的考察に移行する。この第二巻半ば以降に展開される政治的（ポリス）的正義に関する所謂「構成的」考察において、ヘッフェが注意を喚起する眼目が、フシユケー（魂）とポリス（国家）とのアナロゴス（類比）である。すでに、批判的考察においてギリシア的伝統を背景にして提示された、自己実践・自己責任（ト・ヘアウトゥ・プラッテイーン）、あるいはヘッフェの言う *Idiopraxieformel* が、ここでは諸機能を構成する支配秩序としての正義という形姿で展開される。ここでの問題は、フシユケーの三機能、ポリスの機能の三階層、そしてポリスの三類型（『国家』篇では、さらに、この第二類型の下位区分として四つの墮落形式が叙述される）、これらの対応（類比）関係あるいは相互限定関係をどう読み解くか、ということである。

ヘッフェは、この問題に関して、単純な類比関係としての解釈を退け、言わば傾斜比重的な限定関係の原則を適用して、

複雑に入り組んだ関係を独自に読み解いている。ヘッフェのこうしたプラトーン理解が全面的に首肯し得るものか否かとはもかく、この論文はプラトーン解釈に関してのみならず、政治哲学の根源的問題に関して刺激的な示唆を与えてくれるように思われる。プラトーンの『国家』篇は、単なる正義論でも、単なる国家論でもなく、いわんや単純な理想国家論あるいはユートピアではない。フシユケー（魂）とポリス（国家）の、一般的に言えば、人間における個性と共同性の、相互限定関係の理解のあり方にこそ、プラトーンの思惟の核心あるいは謎があると言えよう。

オトフリート・ヘッフェ

フシケューとポリスのアナロゴスについて

——プラトーン『国家』篇、第二卷、367a-374d

- 一 一つの思考実験
- 二 内発的正義
- 三 充足を通じての平和？
- 四 プレオネクシアーからの支配の誕生
- 五 個人とポリスの類比に寄せて

一 一つの思考実験

プラトーンの『国家』篇、第二卷の中頃、369b以降には、二重の視点の転換がある。プラトーンは、方法的には、批判的考察から構成的それへと、主題的には、人格の属性としての正義、人格的正義から、共同体の属性としての正義、政治（ポリス）的正義へと移行する。何故これら「方法と主題」の変更がなされたのか。これまでの議論が蹉跌したからである。すなわち、何人かの相手と言わば助走として代わる代わる議論が闘わされたにもかかわらず、正義に関する二つの問い、「第一に」前提となる問い、正義とは何か、「第二に」主

「フシケューとポリスのアナロゴスについて」

要な問い、どの範囲で不正よりも正義を選好すべきか、これらいずれの問いにも答えることができなかつたからである（第一卷、345b-c参照）。グラウコーンは「善きもの」を三つに分けているが（第二卷、357a-d）、ソークラテースはその中で、正義を、それ自身のためにも、その利点のためにも好まれる最大の「善きもの」（マギスタ・アガタ）（第二卷、375d e）としている。すなわち、彼は、正義は為す甲斐のあることである、ということ期待しているわけである。しかし、トゥラシユマコスによって持ち込まれ、アディマントスによって、ソークラテースを挑発するために、先鋭化された立場からは、正反對のことが述べられる。曰く「されば、不正を為し、しかる後に」——神々がたしかに存在している、と仮定しての話だが——「我々の不正の果実から、お供えをすることにしよう」（365e）。

グラウコーンとアディマントスは、「それまでの対話が」

蹉跎した原因を、ソークラテースが専ら批判的対話者としての役割のみを演じてきたことに帰している。これに伴って、正義という主題のあり方そのものが問題になる。有名ではあるが、議論の余地のある類比（この点に関しては、Neu J. 1971: Plato's Analogy of State and Individual: The Republic and the Organic Theory of the State, in: Philosophy 46, 238-254）からして、ソークラテースは、従来説明されてきた正義、個人の正義は、大文字で書かれた共同体の正義よりも遙かに小さな文字で書かれているので、より識別し難いと考えている（第二巻、368d-369a；第四巻、434d f. 参照）。二重化した視点の転換のうち、第一の、批判的対話から構成的それへの転換は、持続的に企てられるが、これに対して、第二の主題的転換は、暫定的に行われるに過ぎない。類比に従って、政治（ポリス）的正義が人格的正義に取って代わるのではなく、むしろ両側面が探究される。〈政治（ポリス）的なるもの〉は文字から構成されているから、それ自体で読解し得るテキストを提供している。それ故、リーブの見解とは対立することになるが（Reeve, C. D. C. 1988: *Plosopher-Kings. The Argument of Plato's Republic*, Princeton）

〈政治（ポリス）的なるもの〉は、個人からはじめて解釈され得ることになるのではなく、それ自体において解釈される。そして、〈政治（ポリス）的なるもの〉にあつては、「構成要素としての」文字が大きいから、専ら政治（ポリス）的な読解から始めて、これをポリスと個人との構造的同型性（Isomorphen）を利用する類比的な読解に繋げていけばよいわけである（第四巻、434d ff.; 第九巻、576c ff.）。勿論、専ら政治（ポリス）的な読解に際しても、個人的アスペクトは一つの役割を演じ得る。それどころか、政治（ポリス）的正義と人格的正義との交錯は、政治（ポリス）的言明の一部を成し得る。

プラトーンの政治的ないし国家論的な考察は、次の三つのことを問題にしている。(1)何故、そもそも人々は一つのポリス（国家）に結合されるに至るのか、という前提となる社会学的問題。(2)如何なる条件において、彼らの共同生活は正義に適うものとなるのか、という正義理論の主要問題。(3)どの程度、正義に適うポリスは、万人の福祉（幸福）に奉仕するのか、という社会幸福論的（sozial-*edaimonistisch*）な問題。政治（ポリス）的諸関係は人格的正義の認識を容易に

するはずであるから、(4)それらから人格的正義にとって何が帰結するのか、というものはや政治（ポリス）的ならざる問題が加わる。プラトーンはこの問題を魂の三部分説と結び付けているから、類比的読解は対応関係に取り組まなければならぬ。魂の三部分は、それが大文字で書かれるかぎり、三身分にも、ポリスの三段階にも反映される。その他に、(5)政治（ポリス）的観点と人格的それとの間には、交錯があり得る。この交錯は、政治（ポリス）倫理と人格的倫理との統一という、『国家』篇の基本テーゼを強化している。

ソークラテースは、彼の構成的な諸考察を、ポリスの生成という形式で展開している。この形式は多くの部分から成る思考実験として貫徹されている。諸部分にあっても、それだけで自立しているのではなく、専ら一緒に一つの共同体を形成している様々な諸契機が、問題となり得よう。プラトーンはこの点について明言していないが、にもかかわらず、彼は最初の段階から、一つの完成したポリスを提示しているように思われる。従って、諸部分は、一つの発展の諸契機ではなく、その諸段階である。プラトーンが提示している様々なポリス形式の継起は、(1)「真実の」（アレテーティネー）、言わば健康

「フッシュケーとポリスのアナロゴスについて」

なポリス（ホースペル・ヒュギーエース…第二卷372e）から始まる。このポリスは、人間の基本的な欲求から構成されており（第二卷369b-372d）、ここには、市民として農民、手工業者、商人が存在するに過ぎない。これらの市民は、完全に展開し尽くされたポリスにおいては、第三身分を形成する。(2)次に明確なアンチテーゼとして続くのが、文明化された諸々の快適さを伴うポリスである（第二卷372d-376d）。プラトーンは、このポリスを、肯定的・積極的に快適ないし安易なポリスと呼ばずに、否定的に「過剰な」（トゥルホーサ）、そして「熱で膨れ上がった」（フレグマイヌーサ）ポリスと呼んでいる。ここからは、文明批判的な言外の響きが感じ取られる。（リーウ1988, 170）がこのポリスを特別には取り上げず、専ら最初のポリスの墮落形式としてのみ捉えていることは、説得力を持たない。この過剰なポリスは、（統治は行わない）守護者（ヒュラケス）ないし補助者（エピクローイないしポエイトイ、第三卷414b）という新たな市民集団を必要とする。これは第二身分、つまり戦士の身分（ストラテイオータイ…第三卷414d）を形成する。(3)「このポリスに」文明の悪しき状態を防ぐために、ポリスの浄化（カタルシ

ス)が結び付けられる(第二卷367d-第五卷471c)。(4)この生成は、統治を行う守護者たち(アルコンテス:第三卷414c)の、つまり哲人王たちの支配において頂点に達する。彼らは、カッリポリス、「美しき都市国家」(第五卷527c)において、諸身分の調和を介して、(習俗規範的に)善き生活と幸福な生活との統一を成立させる(第五卷471c-第七卷541b)。この統一において、政治(ポリス)的正義にとって、これは後に(第九卷576b-593bと第十卷608c-621d)人格的正義にとっても明らかになることであるが、かの最善のことに属することが示される。

提示されているポリスの段階は四つなのか、それとも三つに過ぎないのか。この問題は、哲学者支配を一つの固有の段階と見なすのか、それとも浄化過程の特に強調された完成(第四卷427d, 434参照)とのみ見なすのか、によって決定される。哲学者支配が、三つの波(トゥリキュミア:第五卷472a)という関連する議論の最後の部分を成していること、さらには、その哲学者支配が現実化可能性の諸々の根拠から導入されること(473c-e)、こうした事情からすると、二番目の解釈が妥当と言えよう。この解釈に従えば、テーゼ、本

源的調和、アンチテーゼ、この調和からの「逸脱」、総合テーゼ、再獲得された調和という段階の歩みが存在することになる。

プラトンは、彼の「呈示している」ポリスの生成の厳密な「理論的」地位を明らかにしていない。ミュートス、神話(物語)ではなく、ロゴス、思惟、論議(第二卷369a:第六卷487c)が問題になる、ということからすれば、歴史的に理解するのは妥当でない。最初の段階は、現在の没落と、将来において新たな開始とが漸次後続していく、どちらかといえは幸福な過去を、代表(象徴)していない。プラトーンが企図しているのは、むしろ思惟カテゴリーによる構成である。

これは、以下のことによって、いずれにしても、単なる机上の空論とは区別される。すなわち、第一段階と第二段階は、可能なかぎり現実に近い形で構成されており、これに対して、第三段階は、たしかに、政治の大きな新しい構想として、政治的現実からは遠く隔たっているが、しかし、プラトーンが強調しているように(第五卷473a-f;第七卷540d)、現実化可能性によって特徴づけられている、ということによって(Vgl. Burnyeat, M. 1992: *Utopia and Fantasy. The Practi-*

cability of Plato's Ideally Just City, in: J. Hopkins/A. Savile (Hgg.), *Psychoanalysis, Mind and Art*, 175-187)。

正義に適った社会を構想する、という課題が、構成を導く糸を与えている。先行する考察においては、正義の価値については決着が付かなかつたから、中間の段階は、現実の社会をイメージしていても、しかし、決着の付かなかつたことを度外視しており、従って、正義や不正のエレメントを欠いている。現実には近いけれども、正義には無縁な社会を、プラトーンは、第一段階と第三段階とにおいて、二つの異なる対立するイメージと、すなわち、政治（ポリス）的正義の根拠を異にする二つの理想と、対比している。健康なポリスは、デカダンスを引き起こす要因、つまり不正の誘惑を知らない、いまだ無垢の共同体を代表している。一種のパラダイスである第一段階においては、正義はひとりで人間の背後で生じる。第二段階からすれば、その種の内発的正義は非現実的である。過剰なポリスは、現実により近いことを名目にして、本源的正義の喪失を上演してみせる。この喪失に対して、浄化されたポリスは、第二の理想を、すなわち、対応する予防措置を通じて墮落の諸要因を支配した共同体を対置する。プ

「フシユケーとポリスのアナログスについて」

ラトーンは、一方の健康なポリスにおいては、人格以前であるだけでなく政治以前でもある本源的正義の理想を、他方の浄化されたポリスにおいては、人間の責任にその本質がある真正な正義の理想を、標示している。「後者においては」政治（ポリス）的正義は、支配者である哲人王の人格的正義に結び付けられている。

この種の構成は、ヘーゲルの弁証法を想起させる。無垢の直接性（無媒介性）、紛争はないが、実現不可能な社会が、現実に近いが、紛争を伴う社会へと移行し、この社会に、再び、媒介された直接性（無媒介性）、紛争のない、たしかにいまだ現実的ではないが、原理的に実現可能な社会が続いていく。

ポリスの最初の両段階に関する言明は極めて僅かで、それどころか貧弱でさえある。プラトーンは、このことに伴い、解釈を困難にしている（『国家』篇のコメンタール、あらゆるより詳細な分析が、ほとんど欠けてもいる）。いずれにしても、プラトーンは、彼にとっては、第三段階、ポリスの浄化と哲学者支配におけるその浄化の完成のほうに遥かに問題であることを、暗示している。我々は専ら政治的な読解から

始めて（2節―4節）、それから（5節）、この読解が、個人とポリスの類比という観点からして、一定の修正を必要とするかどうか、を考察することにする。

二 内発的正義

最初の理想においては、現実化可能性への指摘が欠けているにもかかわらず、プラトンは、純粋な虚構ではなく、むしろ一定の認識上得るところを伴う構成を呈示している。責任を問われる必要のない政治（ポリス）的正義の社会的諸条件に関心を向けながら、プラトンは、虚構されたものではないが、それでもやはり現実に近い共同体の輪郭を描いている。この共同体については、言外に以下のような論証課題が立てられている。如何なる条件の下で、正義は、自発的に、すなわち、正義を思考する作為なしに、ポリスの場合には、正義に適う諸制度や法律なしに、個人の場合には、正義に適う市民あるいは支配者なしに、成立するのか？

プラトーンにとっては、一般性の要求を伴う言明が問題であるから、彼は全ての部分的関心や歴史的特殊性を排除している。彼は以下のような人間学的な基本的所与に訴えている

が、これは人間学に対する今日的懐疑にも耐え得るものであろう。すなわち、人間は非自立的であり（「誰も自給していない」）、従って、助けを必要としており（「誰もが多くの人を必要とする」…第二卷369d）、そしてこの意味で、自然本性からして、社会的である。こうした構成は経験を充たす諸前提を手がかりにしているから、単なる当為であるという非難を免れている。そして、この構成は経験的な現象だけでなく、これに加えて規範的アスペクトにも訴えるから、自然主義的な人間学とは異なり、自然主義的誤謬に晒されることもない。すでに人間学的諸前提がそうであるように、規範的諸前提もまた、時代を超えて妥当することになろう。

すなわち、健康なポリスを支配しているのは、高次の理想ではなく、（啓蒙された）自己関心、より詳しく言えば、生きること（生き延びること）への確かに動物的な関心である（369d：トゥー・ゼーン・ヘネカ）が、これは、生活を容易にすること（Vgl. 369c：アメイノン、よりよきもの）への関心の分だけ、補完されている。アリストテレースとは異なり（参照『政治学』第一巻、第二節、1252a25-34）、プラトーンは〈単独で存在すること〉を人間学的に不可能とは考え

ていない。とはいえ、生活に必要な労働という枠の中では、快適ではないことと考えている。協働の諸々の理由から行われる集住（シュノイキア：369c）は、一つの意識的計画化のおかげでもあり得るし、あるいはしかし、本能に近い衝動的なし「見えざる手」のメカニズムのおかげでもあり得る。プラトーンは、生活を容易にすることに対しては合理的な衝動の力を導入しないから——これは、いずれにしても、出産計画という狭い領域では（第二卷372b f.）、暗示されている——、そして、その他に彼は、回顧しながら、神の好意について語っているから（第四卷433b f.）、第二の解釈が説得力を持つように思われる。正義についてのプラトーンの一般的な基準、すなわち、各人をして自分のことを為さしめる自己実践公式 Idiopraxieformel（タ・ヘアウトゥ・プラッティン：第四卷433a-435d）に注意が払われて、各人が自分の素質に従って労働するならば、全てがより豊かに、より美しく、より容易になるから（第二卷370c）、最高度に生活は容易になることになる。

生活を容易にすることは、誰にとっても善いことであるから、集団に関してだけでなく、配分に関するもまた、あらゆる

「フシケターとポリスのアナロゴスについて」

る個人にとって利点を持つことになり、そして、この理由から、正義という地位を持つことになる。より詳しく言えば、それは、労働生産物の交換を通じて利点が生じるから、交換の正義という地位を持つことになる。従って、プラトーンは、間接的であるに過ぎないにしても、彼の二つの主導的問いに対して、唯一の答えを与えている。健康なポリスの諸条件の下では、共同生活は、正義に適うだけでなく、誰にとっても利点を持っている。同時に、このエレメンタールなポリスは、美しきポリスにおいてようやくはじめて言明される一つの属性を、すでに自らのものとしている（第五卷422e-423d）。不正な国家体制は多くの国家から、つまり異質の部分から構成されている。例えば、寡頭制は富者の部分と貧者の部分から構成されている（第八卷551d 参照）。これに対して、健康なポリスの市民は統一性を成している。個人の幸福と全体のそれとの調和は、理想的ポリスにさえ欠けている完成度に達している。というのは、少なくとも、哲学者たちは、そこ「理想的ポリス」では、暫時、自分たちの幸福を放棄しなければならぬからである。すなわち、彼らは、哲学することを許される代わりに、支配しなければならぬ（第七卷540

a.f.; また第七卷 519b ff.)。

エレメンタールなポリスを構成する決定的なエレメント、すなわち、助けを必要とすること、この点については、その規範的な部分においてだけでなく、その記述的な部分においても、争う余地がない。挙げられている欲求は、総じて生活に極めて必要なもの（アナンカイオタテ：396d）である。にもかかわらず、道は「裸の生活」から快適かつ善き生活に至らない。プラトーンは、暗黙のうちに選択をして、労働を介してのみ充たされ得る生物学的欲求に関心を集中させている。子ども、病人、障害者への援助の必要も、性や生殖も、同じく、例えば承認、愛、友情を求める心理学的（「情緒的」）欲求や社会的欲求も、あるいは教育への欲求も、構成的役割を演じていない。水や空気などへの生物学的な欲求でさえ、労働によって媒介されていない欲求は、特に現れてこない。プラトーンは、これら全ての欲求を次のポリスの段階においてさえ正面切って導入していないから、文字通り一個のマルクス主義者のように見えるが、しかし、彼が志向しているのは、生活に必要なものそのものではなく、その経済的部分である。その枠の中でようやくはじめて、つまり第二次

的に、彼は、必要なものから必要でないものへと、歩を進める。エレメンタールなポリスは、一つの協働的な労働と職業の世界として構成される。

人が様々な職業を求めること、人がロビンソンとしても生計を立てることができること（369e ff.）、このことをプラトーンは否定しない。しかし、協働の利点について、三つの互いに補完し合う事態が述べられている（374b-c 参照）。(1) 熟練の利点（テクネー、「技術」：374c 参照）、技術原理、(2) 自然本性的な才能の差異が厳然として存在する α と (370a-b, 第三卷 415a-c 参照)、才能原理、(3) 専門化を通じての生産性の向上（370c ff.）、狭義の専門化原理。

アリストテレースは、ポリスの生成を、男女、主僕、親子の関係から成る家共同体の形成から始めている。このアリストテレースとは異なり、プラトーンは、家共同体を飛び越えている。従って、プラトーンは、絶対的な援助の必要からではなく、相対的なそれから始めているわけである。一緒になるのは、相対的に自立する大人たちであり、しかも、勘定に入れられるのは、男たちだけである。彼らは、才能の差異にもかかわらず、互いに支配・服従関係にはないから（時に導

入される従僕たちが例外を成している)、プラトーンは、言外に、さらにもう一つの構成エレメント、すなわち、人々は何らかのかたちで同じ才能水準にある、という平等の諸前提を適用している。―但し、因みに言えば、プラトーンが、妻子の共有というような議論の余地のあることを、ほとんど留保もせず、つまり、どちらかと言えば躊躇いなく、(いづれにしても、上位の身分に取っただけであるが)導入していること、このことは、恐らく、ここでは、彼の体系的な根拠を保持しているであろう。すでに、エレメンタールなポリスにおいて、家族の諸関係が何ら体系的役割を演じていないから、以下のポリスにおいても、家族の諸関係は、それらの人間学的重要性を伴って視野に入ってこない。

リーヴ (1988, 172ff) は、三つの原則うち二番目の原則を、unique aptitude doctrine、唯一の才能についての教説として、解釈している。しかし、エレメンタールなポリスのように、あまり専門化が進んでいない労働世界においてさえ、各人を排他的かつ同時に一義的に一つの適切に定められた職業に就かしめるような厳密な割付けは、非現実的である。各人はそれぞれ、自然本性からして異なり、別の生業(エルゴン、

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

仕事)に適している(370a-b)―というプラトーンの見解は、より慎重な解釈を許容する。こうした解釈に従えば、予め与えられているのは、人が筋肉労働に向いているのであれば、靴屋、機織師、指物師に適していること、人が肉体労働には虚弱すぎるのであれば、商人にならなければならないこと、こうしたことが示される、才能の方向付けに過ぎない(第二巻 371c-f)。

挙げられた三つの原理は、共に、一人格は「全ての他のことには取り組まず」(370c)、「自分の任務のみを引き受ける」べきである(参照 374b-c)、という広義の専門化原理を根拠づけている。ここには、すでに自己実践公式 *idiopraxiotele* が窺える。この公式は、「各人に、自分が責任を負うことを、果たさしめる」(ダ・オフエイロメナ・ヘカストー…第一巻 331e)というギリシア共通の正義原理を、受け入れている。プラトーンに従えば、いづれの身分も、それに相応しい任務を果たすべきである。哲学者は支配し、守護者は守護し、そして第三の身分の中では、誰も自分の職責だけに精励すべきであり、例えば、大工として、靴屋も営んだりすべきではない。自己実践原理は、二つの方向で読むべきである。

各人は、「自分の仕事」、自分の任務と役割を果たすことによつて、彼は、一面では、自分に才能の与えられていることを為し、他面では、自分の才能のおかげで、共同福祉に貢献する。このようにして、人は、個人と共同体の両面において正義に適うことになる。かくして、『国家』篇においては、しばしば主張されるようには、有機体論的国家論は問題になり得ない。

プラトーンは、職業的分化を広く進展させる。結局、すでにエレメンタールなポリスも、村以上であり、むしろ小都市である。ここでは、農民、羊飼、手工業者、商人、日雇い労務者、水夫の協働は、牧歌的生活に導かれる。こうした牧歌的生活を、ルソーは、「第一論文」の中で、再び甦らせている。嫉妬、羨望、そして他の「非社交的情念」から自由に、市民たちは一体となって生活し、完全に健康な生活を送った後、高齢になってようやく亡くなる(第二卷 372a-d)。

エレメンタールなポリスは、社会的規範も、公的強制力も知らない。このポリスは、法律、役所、また法や政治以前の社会的強制を欠き、最も厳密な意味で支配から自由である

(vgl. Höffe, 1987: Politische Gerechtigkeit. Grundlegung

einer kritischen Philosophie von Recht und Staat, Kap. 7. 3)。従つて、このポリスにおける私的福祉と一般的それとの調和は、完全に独りでに成立する。労働によって媒介された諸欲求の合理的充足が問題になるにもかかわらず(327a f.)、ヘーゲルの意味でのブルジョア社会は、現れていない(『法権利の哲学』, §182-256)。エレメンタールなポリスは、労働と職業の世界を、それらの背景にある基礎、家族からだけでなく、それらの公的暴力故の補完からも、遊離させる。そのポリスは、市民社会の内部で、その最初の契機に、すなわち、(経済的)諸欲求とそれらの充足の体系に、制限されている。たしかに、自分の占有するものに注意が向けられるが(第二卷 371a ff.)、にもかかわらず、「ブルジョア的な」権利要求は現れてこないし、その権利の司法や「公権力の処罰」による公的保護も現れてこない。プラトーンの牧歌的小都市国家は、純粹に経済的に、分業と専門化によって組織されているから、近代的アナーキズムの最も厳格な尺度さえ充たす一つの「自由市場」に他ならない。

三 充足を通じての平和？

[Friede durch Zufriedenheit?]

第二のポリスにおいては紛争が至る所で展開されるが、これに対して、第一のポリスの市民たちは、包括的な平和の中に生活している。この平和は、市民どうしのそれだけでなく、隣国とのそれ（対応する紛争は欠けている）、そして神とのそれでもある（372b）。ところで、両方のポリスは、人間とその欲求との関係を通じて区別される。この関係に伴い、心理的な事態が、政治（ポリス）的なるものに影響を及ぼすことになる。内的不満、より多くを欲すること [Mehrwollen in der Begierigkeit]（プレオネクシア）は、外的不満を生じさせるが、これに対して、満足している人たちの間には、社会的平和が、端的に言えば、充足を通じての平和 [Friede durch Zufriedenheit] が、支配する。かくして、政治（ポリス）的なものとは心理学（フシケター）的なものとの間には、類比だけでなく、相互依存関係さえある。但し、この際、心理学的なものが優位にあり、リア（Lear, J. 1992: Inside and Outside the Republic, in: Phronesis 35, 184-215）が論

「フシケターとポリスのアナロギスについて」

じているところとは異なり、両者は同じ地位にはない。健康といった身体的諸条件、あるいは物質的福祉といった経済的諸条件が、外的・社会的な平和を決定するのではなく、むしろ問題は、人間の性格、彼の内的な平和である。

本源的に平和な多くのユートピア、楽園、怠け者の天国 [Schlaraffenland]、あるいは黄金時代に関する物語においては、人間は労働する必要がない。こうした前提を、プラトンは、現実主義的に放棄している。彼は、他のところでは批判しているヘーシオドス（『労働と日々（エルガ・カイ・ヘーメライ）』第五巻、119）に従い、市民たちに生活必需品を自ら調達させている。ところで、生活必需品が僅かである場合は、僅かしか労働しなくてすむだけでなく、仲間同士で争う動機も僅かしかない、ということも明らかである。従って、プラトーンがエレメンタルなポリスを相対的に争い少ないポリスとして想定しているに過ぎないのであれば、彼に同意することは可能であろう。しかし、厳密に紛争がないことをより強く主張するのであれば、彼はそれを証明しなければならぬ。プラトーンが前提にしている労働収益と生活需要との調和は、いつも崩れかねないが、それは、以下に述

べるように、専ら内的不満からのみそうなるわけではない。

第一に見出されるのは、〈経済以前の〉理由である。天候不順による不作といった不利な自然的諸条件は、財の供給をドラスティックに減少させかねないから、満足している人間でさえ、不足を託つことになりかねない。さらには、職能教育は、それ以上に、その習熟に労苦を要するから、必要な労働は「ひとりでに」いつも成立するわけではない、という〈経済内の〉問題がある。その上、多くの市民―子ども、病人、不具者、障害者―は、極めて僅かな労働生産性しか有さない。そこで、彼らのために、家族内ないし部族内の連帯を要求する者は、啓蒙された自己関心という通常支配的な「道徳」とは矛盾をきたすことになる補足条件を導入する。その他にも、彼は、多くの障害者、病人、不具者が現れるところでは、「自動的に」要求を引き下げることになる、あるいは、労働業績を引き上げるか、いずれかを為すことになる、という心理的な法則性を想定せざるを得ないであろう。労働は労苦を要するから、身体的に優位にある者たちが、自分たちの生活必需品を、労働を通じてよりも、むしろ暴力を介して、知的に優位にある者たちが、労働を通じてよりも、むしろ詐術を通

じて、調達しようとする、へメタ経済的な〉危険が、結局、浮上してくる。それよりもなによりも、すでにエレメンタルなポリスにおいて、経済は分化されているから、経済は契約なしにはすまないし、契約はまた、形式的規則や刑法上の強制なしにはすまない。動物の世界を一瞥してさえ、「充足を通じての平和」というプラトーンのテーゼは、直観に反するものである、ということが判明する。動物は、相対的に狭く限られた基本的な欲求しか持たないにもかかわらず、集団の中でも、種の内部でも、種の間でも、総じて平和的に生きてはいない。

従って、紛争をなくすためには、市民たちが欲求を控えめにしたり、労働世界で協働したりすること以上のことが必要である。第一に、前経済的に、自然が十二分に豊穡であり、その豊饒性を信頼できるならば、第二に、経済内の、労働生産性が、自分と家族の生活必需品にとって充分であるならば、最後に、メタ経済的に、暴力も詐術も交換の正義を毀損しないならば、その上、契約の世界が紛争なしに機能するならば、そのとき、しかしまた、そのときにのみ、総じて人は平和に生きる。結局、純粋な相互関係は、概念からして、あ

あらゆる対立関係を締め出す、というプラトーンのテーゼは、分析的命題としてのみ説得力を持つに過ぎない。これに對して、控えめな人間たちの間では平和が支配する、という綜合命題は、説得力を持たない。

四 プレオネクシアーからの支配の誕生

健康なポリスから過剰なポリスへの移行は、直接的には、次の二つのことを示している。一つには、如何なる条件の下で、内発的正義は失われることになるのか。もう一つには、何故に、この喪失が予期され、一定の必然性を伴って支配が成立するのか。人間たちの間で必要となる支配は、人間の内部においても、人間の魂の中でも、必要である。この第三の今のところ間接的な証明目標は、ポリスと個人との類比から明らかにされる。

プラトーンは、少なくとも彼の同時代人にとっては、この相対的に満足している状態は非現実的なものと、見なしている。グラウコンからすれば、このエレメンタールなポリスについて記述された生活は、牧歌的なものではなく、動物（豚）のみが満足するに過ぎない生存である（372d）。そ

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

ここで人は貧しく、喜びもなく生活しているわけではないとしても、プラトーンは、この異論を是としている。とはいえ、最初のポリスを健康で真実なものとして、第二のポリスを過剰で熱で膨れ上がったものとして記述しているところから見れば、後者の価値が貶められている感じを抱かせる。新しいポリスは、より現実に近いとしても、規範的観点から見れば、後退している。欲求との新たな関係、より多くを欲する、ということ Mehrwollen は、脱自然化と疎外として現象し、対応するポリスは、退化として、デカダンスと退行として現象する。修辞学的手段を持って立証責任を逆転させるならば、プラトーンは、都市文明についてはポジティブに、あるいは発展した社会についてはニュートラルに語り、例えばカントと共に、この発展した社会が人間のあらゆる能力を発展させることを是とすることができであろう（「世界市民的見地における歴史の理念」第四節）。実際には、プラトーンは、第一段階においては、専らポジティブなことのみを、第二段階においては、とりわけ、ネガティブなこと、身体的病理（病氣）や特に社会的病理（紛争）を、強調している。社会的病理に属しているのは、芸術家、音楽家、詩人、吟遊詩人、

役者、踊り子の登場である(第二卷 373b)。しかし、彼らは、リア (Lear, 1992, 210) が想定しているのとは異なり、以前の健康な有機体の中に病理的エレメントをもたらしているのではなく、むしろ、不満足から病気になるってしまった有機体の統一に不可欠の部分を形成している。

政治(ポリス)的側面と心理(フシユケー)的側面との間の相互依存関係は、心理的なものの優位の下で、新たに存立している。身体的病理と社会的病理とは並行して登場するが、両者は第三の魂(フシユケー)の病理から引き起こされる。

しかし、魂の病理は、単純な自己関心中に存するわけではない。プラトーンは、利己主義に対して戦いを挑み、それに代えて利他主義を要求する道徳主義者ではない。彼が立ち向かうのは、反生産的な自己関心、より多くを欲すること、プレオネクシアーに過ぎない。この説明もまた、道徳主義者の行われてはいない。プレオネクシアーは、外から墮落を促す諸力の介入にも、原罪といった内面的墮落にも、また私有財産を多くの紛争の原因としたルソーや後にはマルクスにおけるような社会的原罪にも、還元されない。プラトーンは、不満足であることを、あらゆる道徳的な言外の調子なしに、

端的に事実として導入することによって、より多く欲することを人間の条件 *conditio humana* の一部として、つまり人間が持続的に免れない危険として、説明している。

すでに述べたように、充足状態は、プラトーンの意図に反して、全ての紛争から護られているわけではない。だから、非充足状態は、必然的に紛争へと導かれてしまうのか、という反対の問いが立てられる。ポリスの内部で、より多く欲することから財の逼迫を、ここから分配をめぐる闘争が、明らかに推論できる。プラトーンは、別のかたちで議論している。彼においては、紛争は、さしあたり、ポリスの対内的観点からではなく、その対外的観点からのみ成立する。その際、彼は、直接的には、より多くを欲することに注意を喚起していない。分業という一般的原理に従って、新たな欲求、文化と奢侈の欲求が、対応する文化と奢侈の職業を必然化する。しかし、奢侈そのものは、いまだ紛争の原因ではなく、住人の増加という副次的結果がはじめて、それ故に、農地の逼迫と隣国に対する戦争との脅威をもたらす(373e)。

攻撃的に他国を獲得するためにせよ、防衛的に自国を防衛するためにせよ—いずれの場合にも、新たな職業集団が必要

となる。これは、プラトーンにおいては、もはや他の職業集団と並び立つのではなく、それらの上位に位置づけられる。この職業集団に伴って、支配という従来知られていなかった社会構造が、ポリスの中に入ってくる。ここでも、三つの原理が、依然として維持される。専門化の原理故に、市民軍ではなく、「守護者」という固有の身分が形成される。というのは、十分に形成されたポリスには、対内的守護者、警官や官吏だけでなく、対外的守護者、本来的な意味での軍人が必要だからである。そして、技術と才能の原理に従って、この身分への帰属は、結局、生まれ（両親）からではなく、固有の諸能力から（第三卷 415 ff.; 第四卷 423c ff.）定義される。これに従って、プラトーンの共和国は、その身分的分節化にもかかわらず、民主制的性格を有している。すなわち、指導的エリート層の構成員になることは、対応する才能に恵まれている者には誰にでも開かれている。それよりもなによりも、守護者身分は、プラトーンがいずれにしてもとくには強調していない次のような一つの固有性によって標示されている。すなわち、守護者の導入は、守護者が全ての人に利益をもたらすかぎりにおいて、正当である、という固有性によって。

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

すなわち、守護者の導入は、貪欲な市民たちが他国の領土を（必然的に、と言われている）攻撃することを許容し、同時に、他国の侵略から自国を護る。

プラトーンは、すでにエレメンタールなポリスにおいて、人間的な諸能力の全面的な陶冶という「ルネサンス的理想」に対して、専門化の「人間的」コスト（代償）について論じていない。同じく、彼はここでもまた、職業管理や職業的軍隊のデメリットについて考察していないし、無際限の欲望（貪欲さ）がその二重の代価、社会的には支配身分への従属、財政的にはこの身分に支払われる租税という代価に値するのかどうか、という利得と代償の関係の問題を提起していない。この問いが否定的に答えられるとするならば、無際限の欲望（貪欲さ）は制限され、「新たな人間」が創出されなければならないであろう。こうした非政治的な「逃げ道」が、プラトーンにおいては、一定の役割を演じており、その結果、彼は二つだけでなく、以下のような都合三つの欲求への関係を心得ている。

いまだ前反省的な、純粹に自然的な最初の段階、つまり本源的充足状態においては、人間は自らに充足して安らってい

る。動物から遠く隔たらず、彼は相対的に固定的に制限された(基本的)欲求を有している(第八卷 558d ff.; 第九卷 581^o)。こうした欲求を充足させて、彼は自発的に、そして快い感情を持って安らっている。無制限の欲望(貪欲さ)という第二段階においては、自然的な欲求制限はなくなり、傾向的に無制限の欲求空間が開かれる。第三段階においては、感覚的衝動や貪欲さに対して距離や批判の態度がとられる。本源的充足状態は取り返しがたく失われているとしても、人間は「脱自然化された」自然という不幸な運命に身を委ねてしまふ必要はない。無制限で同時に紛争をもたらず欲望(貪欲さ)は、感覚的衝動や欲求を理性的に馴致することによって、つまり倫理的卓越性(徳、アレテー)、思慮(ソーフローシユネー)によって克服される。その際、最初の健康なポリスの、現実に近い、しかしやはり作為的(擬制的)な性格が確認される。人間の脱自然化は、退行的に「自然に戻ること」、エレメンタールなポリスに戻ることに、によってではなく、前進的に習俗規範的文化によって、揚棄される。

支配に関しては、次のような問いが関連して提起される。

支配はこの習俗規範的文化によって余計なものにならないか、

すなわち、「新しい人間」に伴って、無制限の欲望という支配の根を克服することによって支配そのものを克服する「新しい社会」もまた成立しないか。ここでは、もはや自然のままではない第二のアーキーが、つまり、習俗規範によって陶冶された人間たちの間での支配からの自由が、存在することになろう。「国家」篇は、全面的に拡大された徳に基づくこの種のアーキーについて考量していない。この点には、習俗規範的な教育によっても支配は余計なものにはならない、というテーゼが含意されている。このテーゼは、教育されるべき者たちに対して上位に立つ教育者が必要である、ということに訴えることができよう。それ故、人は恐らく、政治的支配からは自由になり得ようが、あらゆる支配から自由になるわけにいかないであろう。その他に、こうも言えよう。ポリスに係わる教育は、一定の組織なしには成り立たない。プラトンの「学校」、アカデメイアでさえ、一つの階層的構造を有していた、と。しかし、『国家』篇が呈示しているのは、次のようなもう一つの理由である。包括的徳というような困難な教育目標は、万人において達成することはできず、多数者においてもまた決して達成できず、相応しい才能に恵

まれた少数の集団においてのみ、つまり潜在的な指導的エリートにおいてのみ、達成することができる（三つの身分の由来と種類についての神話を参照：第三卷 414b-415d）。

健康なポリス—内的平安 *Friede* を通じての外的・社会的平和 *Friede*—という基本テーゼに対してと同じく、過剰なポリス—対内的擾乱 *Unfrieden* を通じての対外的不安 *Unfrieden*—という基本テーゼに対してもまた、一連の疑念が提示されている。無際限の欲望は極めて多くの要求へと導かれる、というプラトーンの主張は正当である。しかし、高められた諸要求は、他者（他国）の占有物への侵略によってのみ充たすことができる、というプラトーンの主張は不当である。労働生産性を高めることも、やはりできるであろうからである。近現代の過剰社会は、その経済的諸主体の充足状態のおかげではなく、生産性の爆発的上昇に結び付けられている、その充足されない状態のおかげである。この可能性が古代にもあったかどうか、という問題は未決のままであり得よう。いずれにしても、「単純な欲求か、あるいは贅沢な欲求か」というプラトーンのアンチテーゼは、本来的な問題から逸れている、ということが示されている。紛争が生じるのは、

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

健康なポリスが過剰なポリスに墮落するからではなく、—如何なる理由からであれ—財の需要が財の供給を上回り、そして人が充たされない需要を他国の占有物への侵略を持って埋め合わせようとするからである。因みに、単なる経済的紛争を遥かに越えることが存在する。すなわち、カインの兄弟殺しは、羨望と嫉妬に帰着する。

紛争は不可避かどうか、という問題に際して、疑いなく、二つのプラトーンのエレメントに従うことができる。一つは、人間の条件 *conditio humana* における不変的エレメントと可変的それとを区別すること、もう一つは、想定された不変的なもの、つまり欲求の自然本性である。ある集団的脅威が、彼においては戦争の危険が、国家を形成するエネルギーを開放する、という点においてもまた、恐らくプラトーンは正当である。これに対して、紛争は、「無際限の欲望」という心理的に可変のものと、文化ないし文明というその社会的帰結とから、生じてくる、ということとは明らかでない。本源的充足状態という反対のことは、かつて存在したことがなかった、という点はともかく、多分、相対的に控えめな人たちの協働が総じて平和的であったわけでも、無際限の欲望そのものが

必ず紛争をもたらすわけでもないであろう。『国家』篇の背後で響いている文明批判的なトーンからすると、支配は、人間がその文化に対して支払わなければならない代価である、ということになるが、これには説得力がない。

五 個人とポリスの類比

個人とポリスについてプラトーンが行っている類比は、一

瞥して、明らかであるように見える。人格の側面においては、三つの能力ないし衝動力、所謂魂の部分が存在するが（第十卷 604a ff. は、明らかに、二分割を用いている）、しかし、

ポリスの側面においては、三つの身分と三つの段階が存在するから（その際、浄化されたポリスと哲学者ポリスとは、第三段階の二つの位相として数えられる）、以下のような秩序づけに迫られることになる。最下位の身分、手工業者、農民、商人、そして最初のポリス段階は、エピテューメーティコンに、すなわち魂の欲望的、動物的部分に対応している（第九卷 580d ff. では、この部分において、さらに細分化されて、

三つの観点が問題になっている）。第二身分、自身では統治しない守護者、哲人王を補助する者、そして第二のポリスは、

テュモエイデスに、すなわち、活動エネルギーに係わる魂の部分に秩序づけられている。（この部分もまた、第九卷 580d ff. では、さらに細分化される。）そして、最上位の身分、哲人王は、この身分によって支配された、正義に適いかつ「美しい」ポリスと共に、ロギステイコンに、つまり理性的かつ神的部分に対応している。

A 単純な秩序づけ

魂の部分

諸身分

ポリスの段階

欲望

手工業者、農民、商人

健康なポリス

（エピテューメーティコン）

活動エネルギー

統治しない守護者

過剰なポリス

（テュモエイデス）

理性

哲人王

哲学者ポリス

（ロギステイコン）

健康なポリスについては、この秩序づけは、欲求のエレメ

ンタールな、それどころか生活に欠かせないという性格に訴えることができる。しかし、この欲求を専ら動物的なものと考えたわけにはいかない。というのは、人間が動物と共有するのは、最初の二つ、食と住だけであり、これに対して、衣を動物は必要としないからである。その他に、たしかに、蟻や蜜蜂にも分業が見られるが、しかし、それは、熟練、テクネーとしての方法的であるだけでなく専門的でもある形姿のものではない。こうしたテクネーはまた、純粹なエピテュメーティコンよっては不可能である。というのは、一方で、それは活動エネルギーを介して始めて陶冶されるし、他方で、それは合理性のエレメントを含んでいるので、従って、それはテュモエイデスやロギスティコンにもまた秩序づけることができるであろうからである。動物の家畜化、特にその支配は、すでに健康なポリスにおいて見られるが、同じくエピテュメーティコンだけでは可能ではない。さらに、産児計画のためにも、活動エネルギーと合理性が必要になる。勿論、第三身分は、自分が自分自身の福祉のために守護者や哲人王を必要とすることを、洞察しなければならぬ。従って、すでにポリスの第一段階において、二つのより高次の魂の部分は、

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

不可欠である。同様の困難は、第二段階、第三段階にも現れる。すなわち、守護者たちもまた、エレメンタールな欲求を有しているし、その他にも、彼らの活動は、合理性なしには成り立たない。最後に、哲人王は活動エネルギーを必要とする。哲人王たちは純粹な理性的存在でも、神々でもないから、彼らもまた依然として欲望に服している。従って、類比の最初の理解、三つのトリアーデ相互の単純な秩序づけは、たちまち限界にぶつかると。就中、いずれのポリスの段階も、その都度一つだけの魂の部分ではなく、三つの能力全てを必要としている。

こうした困難は、プラトーンが二つの形式の類比を区別している、という点を考慮しても、取り除くことができない。ウィリアムズ (Williams, B. 1973: *The Analogy of City and Soul in Plato's Republic*, in: E. N. Lee/A. P. D. Mourelatos/R. M. Rorty (Hgg.), *Exegesis and Argument*, Assen, 196-206) によれば、第四卷 434e においては、プラトーンは、類比を、意味の類比 (“analogy of meaning”) として、そして、第四卷 435e においては、支配的集団に注目して (“predominant-section-rule”)、部分と全体の関係

規則 whole-part-rule として、導入している。第一のケースにおいては、ポリスの諸関係を、個人へとあっさり移すことができる。第二のケースにおいては、例えば、ポリスの基準となる集団が守護者層であるならば、そのポリスを勇氣あるポリスと呼ぶことができる。

ウィリアムズに従えば、プラトーンにおいては、二つの類比のうちいずれが、どこで該当するか、が述べられていないだけでなく、類比は、両方のケースにおいて、深刻な困難に陥っている。三つの魂の部分を三つの身分に割り当てる際には、例えば、靴直しといった「栄養身分」の代表は、実際には、哲人王が事実登場するかぎり、哲人王の優位を承認しなければならぬし、少なくともそのかぎり、理性を必要とするにもかかわらず、欲望によってのみ規定されることになる。そして、哲人王が登場しないのであれば、靴直したちは、統治され得ないものとして、安定性を欠くもの (“unmanageably volatile”) となる。

この種の困難さ故に、ウィリアムズは、類比の完全な挫折を確認しなければならぬ、と信じている。その際、彼は、プラトーンが二つの箇所で見逃している注意を見逃している。

第四卷 436c ff. に従えば、ポリスの全ての諸関係を、個人へと移すわけにはいかない。むしろ、唯一の比較点である正義だけが問題なのであり、この正義において、両側面、つまりポリスと個人を、「火打石から正義が」が発火するまで、「互いに照らし合わせられ、擦り合わされ」なければならない。プラトーンは、ここで、念を押すようにして、一般的かつ「機械的な」移行を峻拒し、その代わりに、対応関係を創造的に探究することを要求している。436c において、彼は再び、「我々の誰の中にも」、三つの魂の部分、すなわち、獲得術、勇氣、知識欲に対応する「同じ三つの種類と行為様式が見出される」かぎり、単純な割り付けを退けている。従って、ウィリアムズのシャープな論文は、すでにとらわれのない読解の仕方には示されていたこと、すなわち、ポリスと個人の単純な割り付けの失敗を、確認しているに過ぎない。(ウィリアムズ批判については、Lear 1992, 194 ff. もまた参照のこと。)

プラトーンによって要求された対応関係の探究は、435d ff. で暗示されている構造的により複雑な類比に取り組むならば、成果を挙げることことになる。この探究は、プラトーンが、

なるほど言明はしていないが、しかし自明のごとく前提にしている区別から、すなわち、それぞれの魂の部分における、支配的な機能、つまり、優位にあるだけでなく、また支配してもいる機能と、補助的ないし道具的な機能とから、出発する。

この意味では、ポリスの第一段階においては、欲望が支配的であり、これに対して、活動エネルギーと理性は、道具的にのみ臨在するに過ぎない。すなわち、これらは、そのものとしてではなく、欲望を補助するものとしてのみ問われているに過ぎない。第一段階では、情動の領域において対立する力が登場しないから、欲望は、落ち着いた、無垢の、ないし端的な形式で呈示される。この形式は、絶対的により多くを求める欲望や意志も、社会的により多くを求める意志、羨望や嫉妬も知らない。他面では、欲望は、それだけでは、生きる能力がないから、たしかに優位にあるとしても、しかし排他的に現前するわけには行かない。欲望は、自らを支えるために、欲求充足のために必要な労働と労働に先行する職業的陶冶を調達する「経済（オイコス）的活動エネルギー」を必要とする。さらに、欲望は、商業的陶冶、自己労働の完遂、

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

他者たちとの協働を管轄する理性を、つまり、「経済的理性」を必要とする。ところで、欲望の支配が単に道具的な活動エネルギーや単に道具的な理性に結び付けられるならば、魂の第一の部分は、魂の他の二部分を、文句なく、紛争なしに支配することになる。この種の極めて驚くべき支配は、全ての市民に該当するから、彼らは魂の諸部分の構造からして同質的な市民層を形成する。エレメンタルなポリスは、唯一の身分から構成され、このポリスの成員は、自分の中でも（「彼らの魂の中」）でも、また相互関係においても、紛争なしに生活する。

ポリスの第二段階では、優位性は活動エネルギーへと移行する。活動エネルギーは、欲望よりも重要であるだけではない。それはまた、自己実践公式 *Idiopragiefornel*（自分のことを為す）における不介入原理にも抵触し、それが欲望を支配することによって、欲望の本質を変質させる。その結果、欲望に係わる活動エネルギー、「情動的」活動エネルギーないし活動エネルギーを伴う欲望は、欲望を、その自然のままの形姿から疎外し、落ち着いた、従って矩に合った欲望から、矩を欠くギリギリした欲望を成立させる。端的な欲望は、傾

向的に無制限の欲望に姿を変える。けれども、より多くを意欲すること、プレオネクシアーへの変化は、諸困難に、すなわち、他国との紛争へと導かれる。この紛争に対処するのは、活動エネルギーの第二の現象形式、それがそれだけであるかぎりでの活動エネルギー、つまり勇氣である。

プラトーンは、現実主義的に、活動エネルギーの二つの現象形式を、唯一の人間類型に当て嵌めていない。ポリスの第二段階において、無制限の欲望によってだけでなく、勇氣によっても特徴づけられる、同質的市民層にアプローチする代わりに、プラトーンは、二つの形式を、二つの人間類型に、つまり、欲望に係わる農民・手工業者・商人と、勇氣に係わる守護者と共に、割り振っている。二つの身分は、それぞれの仕方で、道具的理性を必要とする。道具的理性は、前者においては、プレオネクシアーのための手段と方法を、後者においては、勇氣のための手段と方法を、規定する。道具的理性は、前者においては、協働的労働世界を管轄し、経済的理性として、これに対して、後者においては、戦争遂行の責任を負って、軍事的・戦略的理性として、呈示される。そして、守護者がポリスの内部で活動するかぎりでは、その理性は、

その領域を、警察、行政、恐らくまた、司法にまで拡大する。

第三段階では、優位性は理性へと移行する。ポリスの第一段階は、暗黙のうちに *in silentio*、端的な欲望においては、道具的理性で充分であり、従って支配的な理性は余計である、ということを示している。そうした理性は、無制限の欲望においてははじめて必要になる。無制限の欲望は、第二段階において優位となり、紛争を招き、そして、プレオネクシアーの代わりに理性が優位となる第三段階への移行を、必然化する。欲望に関しては、この理性は、情緒的活動エネルギー支配する理性として、つまり情緒的理性ないし思慮として呈示される。下位の身分にとって、その理性は二つの形姿をとる。大衆が思慮を有するのは、彼らが一面では支配者に服従し、他面では飲食や愛情については自己を支配する場合である（第三卷 389d-e）。勿論、その種の理性では充分でない。農民・手工業者・商人でさえ、(1) 経済的理性、(2) 情緒的理性に加えて、哲人王そのものが同定を許される最低限の真正な理性を裁量しなくてはならない。従って、理性需要は、零どころか、少なからぬにもかかわらず、第三身分、哲人王を特徴づける、自己において無制限に理性的なものの水準には達しない。

B 複雑な秩序づけ

ポリスの統一

健康なポリス 過剰なポリス 哲学者ポリス

欲望の支配 活動エネルギーの支配 理性の支配

配

端的な欲望 活動エネルギーを伴う欲望 理性的欲望…

プレオネクシアー

プレオネクシアー

道具的活動エネルギー 単なる活動エネルギー 理性的活動エネルギー

勇氣

道具的・経済的理性 道具的・経済的・軍事的理性 政治的理性 共同福祉を義務づけられた

理性

魂が同質の市民層 二つの身分 三つの身分

自発的思慮による充足 プレオネクシアーありは自発的思慮の喪失 正義の貫徹

自発的正義 ポリス内外の紛争 真正な理性…

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

この種の複雑な秩序づけは、次の二つの事情から支持される。第一に、三つの人間類型のそれぞれにおいて、三つの全ての衝動力が存在する、という事情から。第二に、教育は、とりわけテュモエイデス、つまり活動エネルギーに向けられていて、従って、この活動エネルギーこそが、ポリスの第一段階から第二段階に至る過程において墮落させられ、そうして、そのときに教育を必要とする、という事情から。勿論、プラトーンは、彼が『国家』篇において問題にしているロギステイコン、という言葉の下に、一般的な合理性ではなく、第三段階のポリスにとって特徴的な、共同福祉を義務づけられている社会的な理性を、理解している（第四卷 428a ff. 参照）。

支配的機能と道具的機能の区別を前提にして、第一段階からは、次のような「メッセージ」が伝えられている。健康なポリスにおいて現れるのは、徹底的に経済的な活動エネルギーであり、欲望に係わるそれではない。同じく、経済的理性であり、社会的ないし政治的理性ではない。人間たちがエ

メンタールな欲求に充足しているところでは、活動エネルギーを伴う無際限の欲望が欠けているから、人間たちの中にも、人間たちの間にも、紛争は存在しない。これに従って、彼らの共同生活は、啓蒙化された自己関心を介して、すなわち、専ら経済的な理性を伴って、営まれる。すでに、エレメンタールなポリスにおいて、正義が、「誰にも自分のものを」*Jedem das Seine* というプラトーンの原理に従って、支配している。というのは、一面で、各人は専ら「自分の」活動に、すなわち、自分が才能を与えられた活動に赴くから、自己実践公式が充たされる。他面で、各人は、交換において、自分に相応しいものを獲得する。にもかかわらず、正義は、はつきりと登場するわけではない（これは、ようやく第四卷427D以下以降に再び現れる）。というのは、約款、契約、法律、そしてこれらに違反する可能性といった一般的適用条件が欠けているからである。専ら臨在しているのは、内発的な交換の正義である。活動エネルギーや理性は、制限された意味でのみ現れるのに対して、社会的秩序は、自己福祉にのみ関心を示す関与者たちの背後で、ひとりで打ち立てられる。

ポリスの第二段階のメッセージは次のことを伝えている。

活動エネルギーが単なる経済領域を越え、無際限の欲望に達するや否や、様々な困難が浮上し、これらの困難は、真正な理性を要求する、すなわち、人格の次元では、諸々の内面的起動力を理性的に秩序づけることを、社会的次元では、理性に導かれた指導的エリートを要求する。

西欧的思惟の中には、人間の無際限の欲望が傾向的に制限を欠き、紛争を誘発するが故に、これを墮落の原因と見なす傾向が、現存する。人間は、生得の充足限界を持たず、諸々のその時々々の起動力は、それら自身から、内在的に、調和的に共存する能力を持たない、とされるわけである。こうした見解とは反対に、プラトーンは、無際限の欲望を、原則的には、墮落の原因とは見なさず、活動エネルギーという一つの新たな要因が加わる場合のみ、それが墮落の誘因となる、と考えている。テュモエイデスと結びつくことによってはじめて、エピテュメーティコンから、いつまでも充たされることのないプレオネクシアが生成する。このプレオネクシアは、これはこれで、無際限の欲望に対してだけでなく、共存に対しても責任を引き受ける、理性を、そして同時に、もはや内発的ではなく、理性によって創出される、正義を、必

然化する。理性は正義に適う共存を、直接的には成立させない。理性は、魂の中間部分を用い、同じ中間部分によって墮落させられた人間を、言葉どおりの意味で、理性 *Raeson*, *Vernunft* にもたらず。かくして、魂の中間部分は、対立する二つの機能を引き受ける。この部分は、一面では、欲望 *Begehren* からその自然のままの充足状態を奪い、欲望をプレオネクシアーに膨れ上がらせ、他面では、飽くことを知らない欲望 *Begeherte* を再び沈静化させる。

こうした新たな読み方に従えば、ポリスの最初の二段階に関するウィリアムズのアポリアの大部分は解消する。手工業者、農民、商人は、魂の第二の部分からいまだ自由である彼らの欲望のあり方故に、不安定では全くない。そして、彼らは、不安定さがなかったために、欲望のあり方に外から介入する理性を必要としないし、外からの統治も余計である。これに対して、活動エネルギーが欲望のあり方に「侵入」してから、彼らは、外からの統治と自己自身の理性の両方を必要とするようになる。情緒的理性、思慮のおかげで、彼らは、一面では、支配者に服従し、他面では、飲食や愛情に関する自分たちの快楽を支配する（第三卷 389d）。

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」

ポリスの最初の二段階にとって、重要な困難がなお残っているであろうか。疑わしいのは、専門職的才能、十分に豊穡な自然、それどころか、その豊饒性において信頼に足る自然といった現実性のない想定である。しかし、こうしたエレメントは、別様に、すなわち、プラトーンの間いの外にあるものとして、理解できる。二つの形姿の社会的理性という意味での正義に、すなわち人格的正義と政治（ポリス）的正義に、関心を向けて、『国家』篇は、二重の抽象を企てている。『国家』篇は、一方で、自然によって脅かされる全ての危険を外して、人間的要因のみに注意を向けている。他方で、『国家』篇は、人間的なもの内部で、自然的事象、例えば、才能の相違をフェイド・アウトし（勿論、この点は広範囲に及んでいる。というのは、奉仕の機能にしか適さない才能に乏しい人も存在するからである。第三卷 415b）、専ら、人間自身の掌中にあるものに、人間の責任領域に、取り組んでいる。そして、こうした抽象には、しかるべき理由がある。プラトーンは、正義の理論という彼の主題に従って、人間的で、同時に帰責可能な要因のみに注意を払っているわけである。

第三段階に関しても、ウィリアムズのアポリアは解消され

る。哲学者ポリスにおいて、〈全体・部分・規則〉は、端的には妥当しないが、しかし恐らく、“predominant-section-rule”によって資格づけられた仕方では妥当する。共同体が正義に適っているのは、全ての市民が正義に適っているからではなく、恐らく、支配者たち Regenten が正義に適っているからである。支配者たちは、どの身分もそれ固有の活動を遂行するように配慮することによって、正義の自己実践公式の基準が承認されるように図る。同時に、意味の類比も当て嵌まる。一個人が正義に適っているのは、魂のどの部分も正義に適っている場合ではなく、魂の指導的な部分が正義に適っている場合である。これと同じく、ポリスが正義に適っているのもまた、その支配者が正義に適っている場合である。正義に適う国家のケースにおいては、各人は一つの全体の部分であり、この全体は、個人の構造を再現し、部分である個人の構造なしに、全体として、正義に適うものではあり得ない。こういう要求に満ちているだけでなく、疑わしくもあるテーゼを、プラトンは提示していない。共同体の正義を各市民の正義に結びつける代わりに、プラトンは、次のような控えめな主張で満足している。すなわち、正義に適う国

家は、正義に適う個人の構造を再現し、部分における同じ構造を欠くが、しかし、専ら、諸個人の一部分において、つまり、支配者たちにおいて、全体は正義に適うものであり得る、という控えめな主張で。従って、住民の遙かに多くの部分は、あくまでも正義の要求から負担を解除されているが、いずれにしても、あらゆる道徳的要求の負担を解除されているわけではない。思慮は、全ての人に要求される。

『国家』篇における他の諸々の言明が如何に疑わしいものと思われようと、これらの基本的な政治的言明は、今日に至るまで、アクチュアルなものであろう。なるほど、近代の共同体、民主制的法治国家は、諸制度の正義に、より多くの価値を置いている。にもかかわらず、この国家は、制度以前の、そして制度の外の諸条件なしには、生き延びることができないであろう。このことに関連した論争において、市民たちの側からして人格的道徳は必要かどうか、あるいは、啓蒙化された自己関心で充分なのかどうか、が問われている。プラトーンに従えば、二つの段階で、人格的道徳が必要となる。通常の市民たちにとっては、思慮で充分であるが、これに対して、責任を担う政治家は、それ以上のものを必要とする。こ

うした見解は、必要な変更をすれば、今日でもなお議論し得

とする。

ることであろう。すなわち、民主制における市民たちは、彼らが自分たちの共同体に対してあまりにも高い要求を課すわけにいかないかぎりで、思慮を裁量しなければならぬ。そして、政治家たちは、法律と憲法規定のおかげで、人格的正義の大半の重荷から解放されている。しかし、こうした予め与えられた有利な条件は、共同福祉を思考する政治としては、充分ではない。何故ならば、腐敗の危険が脅威となるし、その他に、次の選挙のことを、従って長期的よりもむしろ短期的に、共同体のことよりも自分の選挙民のことを考えてしまふ、という次第に重くなる危険がなお脅威となるからである。

この複雑な秩序づけに対して、それはあまりに「思弁的」である、として反対することもできよう。プラトンは、こうした複雑な秩序づけを全く明瞭に展開しているわけではない、というのは正しい。しかし、その「蝶番の位置」はテキストから支持できる。それに、この秩序づけは、「承認されている解釈律、principle of charity」に従っている。勿論、それはプラトンを寛大に扱うように請うたりはしないが、しかし、諸々の彼の言明から、首尾一貫した意味を掴み取ろう

「フシユケーとポリスのアナロゴスについて」